Human

内向性との闘い

九州第1業務科　合志圃場技術チーム
冨山　可南絵（とみやま　かなえ）

進路は農業への一本道

杉林と田畑に囲まれた家、田植え機やトラクターが行き交う道、刈払機の目覚まし時計――そんな環境で育まれたのは、「自分は将来農業を仕事にするのだろうな」という漠然とした想いであり、高校生になると何の迷いもなく地元大学の農学部への進学を選びました。大学の講義で得られる知識や新たな見識は私にとって魅力的でした。しかし研究者になろうとは思えず、それよりも田畑で作物に触れることの方が楽しかったため、農作業を仕事にできる就職先を探しました。そんな中、主な業務は農作業で、いつでも研究者の話を聞ける、いいとこ取りの採用条件――農研機構の技術支援職を発見します。採用は平成31年4月、つくばでの研修を経て、同年10月に九州沖縄農業研究センター　業務第1科（当時）へ配属されました。

不安よ味方になってくれ

熊本に配属されるにあたり、不安が2つありました。1つ目は極度に内向的な性格による、職場に馴染むことへの不安、2つ目は、初の女性業務科職員として「女性では仕事にならない」という偏見にさらされるのではないかということです。

先輩方は私が馴染めるようにと、何でも相談に応じてくださり、また同年代の職員がいないことを心配して、若手の研究員との交流の機会も作ってくださいました。先輩方の温かいお人柄のお陰で、自分が馴染める居場所が出来たように記憶しています。

ところが私は、「女性だからと、仕事上使えないと思われてはいけない」という気持ちが強すぎて、先輩方の優しさや心配を受け取ることができていませんでした。「馴染めない」「出来ないことが多すぎる」という不安は、3年目になっても付きまといました。

ある時この不安と冷静に向き合ってみると、「女性だから」と邪険にされたり過度に甘やかされたりすることは極めて少なかったと、また「自分が思っているほど周囲は女性職員に抵抗がないのではないか？」と思い直し、そして私の不安の根底にあるものが「現場で働く男性は女性や未経験者を厄介に思うものだ」という自分自身の偏見であることに気が付きました。

その後は少し考えを改め、少しずつ偏見を取り除き、職員として対等であること、素直に教えを乞うことを自分でも意識づけるようになりました。職場内のコミュニケーションは大切と言われますが、私はまだ手探りの状態です。内向的な性格はそうそう変えることができませんが、恐れずに周囲との対話を図りながら、業務に邁進していきたいと思います。

◀ホイールローダに初乗車した日の写真